

日本歴史言語学会 2019 年大会

研究発表要旨

ポスター発表

神田 和幸（国立民族学博物館・外来研究員）
手話の民間語源の発生の歴史的検証

手話には実に民間語源が多い。その理由の1つは手話に文字がなく、手話辞典以外の文献がほとんどないこと、またその手話辞典も聾学校内の教師向けのものであったことが原因で、広く世間に知られていないことがある。近年はビデオによる記録も増え、さらに最近ではモーションキャプチャによるデータ収集も行われるようになり、これから手話の共時的研究は進むと予想される。しかし通時的研究においては文献が増えることは期待できないため、研究方法を創出するなどのパラダイム変換が必要である。

手話の民間語源が広がったのは、手話通訳養成が始まった1963年以降で、一般向け手話辞典が数多く出版され、また手話講師たちが、語源よりも手話の学習しやすさを優先し、昔の手話形を知らないまま現在の手話形から起源を想像し広めたことにより民間語源が増えたと考えられる。実際、手話民間語源が複数存在するようになった時期は手話普及運動の時期と一致する。

本論では、使用頻度が高く一方で民間語源が流布している例として〈ありがとう〉他の語彙について、まず文献情報により語源の変遷の具体例を示すと共に、他の民間語源例を示し、従来型のパラダイムの中で、手話形の変遷と民間語源形成の過程の一般法則の仮説を提唱する。

本論では代表的文献として日本最古の手話辞典とされる「聾啞教授手話法」（明治35年）、全国的に流布した「わたしたちの手話1」（昭和44年）、最も広く手話語源を搭載している「手話の知恵」（大原省三）（昭和62年）を比較し、その変化過程と、変化の構造を示す。また補強証拠として必要に応じて他の辞典類も参照し、変化過程の年代推定の材料とする。

口頭発表

三輪 大樹（京都大学大学院）

中古中国語における介音と硬口蓋化子音について

中国語学では伝統的に、中国語の音節において声母と主母音の間に介在する音として、介音という単位が立てられてきた。介音は一般に音素として扱われてきたが、Duanmu (1990) は現代中国語において、介音は子音の硬口蓋化や円唇化の同時調音と見なすべきことを明らかにした。介音は子音に付随する弁別特徴に過ぎず、独立した音素たりえない。このような視点は、中古中国語（『切韻』に代表される音韻体系）における介音や硬口蓋化子音の性質を解明するにあたり、手がかりとなる。本発表は、古典的音韻論の手法を用いることにより、中古中国語における介音や硬口蓋化子音の音韻論的性質について、従来とは異なった観点を提案するものである。

城田 (1981) によれば、中古中国語において介音を独立した音素と見なすのは難しい。すなわち、中古中国語の介音は硬口蓋化や円唇化の弁別特徴を有するに過ぎず、これを声母や主母音から独立した音素とは見なしがたいという。しかし、中古中国語では i 介音とは別に重紐 A 類において硬口蓋化子音音素が存在することもあり、これら介音の弁別特徴を声母にも主母音にも帰せず、独立した単位のように扱った。発表者は、介音を頭子音の弁別特徴に帰することが可能であると考えた。

重紐が存在する音節、すなわち唇牙喉音において i 介音や硬口蓋化子音には、分布の著しい偏りが見られる。すなわち、硬口蓋化子音は、必ず i 介音と共に出現しており、共転換 (commutation) の手法を用いれば、音素として i 介音を記述するのは余剰であることが判明する。同時に、A 類と子音以外同じ構成要素を持つ B 類の i 介音も余剰となる。結果として、唇牙喉音において i 介音は C 類にしか現れないことになるが、C 類の子音+i 介音のクラスは硬口蓋化子音と相補分布をなすことから、C 類においても i 介音の記述は余剰となる。結果として、中古中国語の唇牙喉音音節では i 介音は完全に余剰であり、唇牙喉音において、A 類と B 類対立と C 類と非三等韻の対立は、どちらも硬口蓋化子音と非硬口蓋化子音の対立として平行的に捉えることが出来る。舌歯音についても同様の操作を施すことが可能で、結果として中古中国語において i 介音の記述は不要となる。

以上より、中古中国語の介音は、現代語と同様に子音の弁別特徴であると解釈できよう。

• Duanmu, San (1990) *A Formal Study of Syllable, Tone, Stress and Domain in Chinese languages*. PhD dissertation, MIT.

• 城田俊 (1981) 『中古漢語音韻論』、東京：風間書房。

藤原 敬介 (京都大学)
パイエン語の言語特徴

パイエン語 (Phayeng) とは、インド・インパール盆地ではなされていたチベット・ビルマ語派ルイ語群 (Luish group, Tibeto-Burman) に属する言語である。パイエン語は、隣接するアンドロ語 (Andro) やセンマイ語 (Sengmai) とともに、チャクパ語 (Chakpa) の方言群を構成する。チャクパ語はすでに死語である。アンドロ語とセンマイ語については McCulloch [1859] に各400語ほどの語彙があがる。本発表であつかうパイエン語については、Chakpa [2009] に700項目ほどの語彙があがる。

チャクパ語を多少ともあつかった言語学的な研究には Shafer [1974]、Matisoff [2013]、藤原 [2012, 2013, 2014] などがある。しかし、パイエン語そのものをあつかったものは管見のかぎりでは存在しない。

ここで Chakpa [2009] の性質についておのべる。この資料は、パイエン村でパイエン人の儀礼をとりしきる N. Toyai Chakpa 氏によるものである。パイエン語はすでに死語だが、儀礼では今も使用される。ただし、Chakpa 氏自身もパイエン語に堪能ではない。儀礼に必要な語彙や表現がかかれたノート等を参照しながら儀礼はおこなわれる。これらの資料をまとめたものが Chakpa [2009] に掲載されている。Chakpa [2009] はベンガル文字表記によるメイテイ語 (Meithei) によってかかっている。パイエン語資料は、ベンガル文字によって発音をしめし、メイテイ語による語釈がついている。

本発表では、パイエン語の言語特徴を、アンドロ語やセンマイ語、さらにルイ語群に属するチャック語 (Cak)、カドゥー語 (Kadu)、ガナン語 (Ganan) などと比較することであきらかとする。Chakpa [2009] を、ルイ諸語と比較しながら分析することで、以下の三点があきらかになった。

1. Chakpa [2009] は、McCulloch [1859] を不完全に参照している箇所があるため、資料のあつかいには注意が必要である。たとえば、McCulloch [1859] でラテン文字により *u* と表記される音は、実際には *a* ないし *ə* と推定される。だが Chakpa [2009] では、McCulloch [1859] における *u* をベンガル文字でそのまま *u* と転記しているようにみえる語例が散見される (例1a)。
2. ルイ祖語の段階では、阻害音について無声無気阻害音と有声無気阻害音には対立がないと推定される [藤原2014]。McCulloch [1859] を分析すると、有声無気阻害音があらわれるのは、ほぼ語中で母音間にかぎられる [藤原2013]。しかし Chakpa [2009] では、語頭で有声無気阻害音があらわれる例が散見される (例1b)。
3. Chakpa [2009] には、これまでチャクパのまとまった資料としてはほぼ唯一のものであった McCulloch [1859] には記載されていない語彙が多数みられる。それらの語彙を分析することで、あらたなルイ祖語の形式を再構することに貢献する (例1c)。

例

Chakpa [2009] によるパイエン語はベンガル文字で表記されるけれども、ここではラテン文字に転写したものをあげる。

- (1) a. ‘vessel’ Chakpa [2009] Phayeng phonggum; McCulloch [1859] Andro phong kum; Kadu k_{am}, Ganan kam; KaduとGanan の形式から、Phayeng やAndro でgum またはkum と表記される語彙は、kam ないしkəm のように発音されていたと推定される。
- b. ‘hand’ Chakpa [2009] Phayeng dakhu; McCulloch [1859] Andro takhoo; Proto-Luish *tak-kh_{ow}, Cak təhú, Kadu təhú
- c. ‘curry (dish)’ Chakpa [2009] Phayeng kal; McCulloch [1859] にはない; Cak kaiN; Kadu やGanan には未確認; Proto-Luish として*kal を再構可能となる。

参考文献

- Chakpa, Ningthaujam Toyai. 2009. *Chakpa Phayenggi Chatnabi*. Phayneg, Imphal.
- Matisoff, James A. 2013. Re-examining the genetic position of Jingpho: putting flesh on the bones of the Jingpho/Luish relationship. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 36(2): 15–95.
- McCulloch, Major W. 1859. *Account of the valley of Munnipore and of the hill tribes; with a comparative vocabulary of the Munnipore and other languages*. Selections from the Records of the Government of India (Foreign Department). No. XXVII. Calcutta: Bengal Printing Company Limited.
- Shafer, Robert. 1974. *Introduction to Sino-Tibetan*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- 藤原敬介. 2012. 「ルイ祖語の再構にむけて」『京都大学言語学研究』31: 25–131.
- 藤原敬介. 2013. 「アンドロ語文法の再構」日本歴史言語学会第3回大会、東北大学.
- 藤原敬介. 2014. 「ルイ祖語の再考」『京都大学言語学研究』33: 1–32.

江川 (1991³: 333) や Declerck (1991: 489) によれば、現代英語における知覚動詞補文は (1) に示す様に各アスペクトに応じて準動詞は使い分けられている。またこのアスペクトによる差異は AspP という機能範疇によって形態素と共に付与されるということから (cf. Felser (1998; 1999) ; van Gelderen (2018))、現代英語における知覚動詞補文内部は (1c) のような構造であると仮定する。

(1) 現代英語における知覚動詞補文

- a. I *saw/heard a man play* the guitar. (完結)
b. I *saw/heard a man playing* the guitar. (非完結)
c. [_{VP} *see/hear* [_{FP<Pred; Asp>} [_{DP a man}][_{F<Pred; Asp>} [_{AspP} *play(ing)* [_{DP the guitar}]]]]]

古英語においても現代英語と同様に、補文内部には原形不定詞および現在分詞が出現する。

(2) 古英語における知覚動詞補文

- a. Ðonne *geseoð hi mannes Sunu cumendne* on genipum mid mycelum mægene and wuldre.
(Mark 13:26. WSG)
b. And þonne ge *geseoð sudan blawan*, ge secgaþ, þæt [hætt] is towerd; and hit byð.
(Luke 12:55. WSG)

しかし、OED などの先行研究によれば、古英語においてはこのような差異は見られないという。このことは(2b)の各時代の福音書を比較してみると一貫して同じ準動詞が用いられていないことから経験的に実証されうる。

(3) 各時代の四福音書における知覚動詞補文 : Luke 12:55

- a. And þonne ge *geseoð sudan blawan*, ge secgaþ, þæt [hætt] is towerd; and hit byð. (WSG)
b. And whanne `3e *seen þe souþ blowyng*, 3e seyen, For heete schal be; and so it is don.
(Wycliffe. EV)
c. And whanne ye *seen the south blowyng*, ye seien, That heete schal be; and it is don.
(Wycliffe. LV)
d. And when ye *see the south wind blow*, ye say, There will be heat; and it cometh to pass.
(AV)
e. And when ye *see a south wind blowing*, ye say, There will be a scorching heat; and it cometh to pass.
(RV)
f. And when you *see the south wind blowing*, you say, ‘There will be scorching heat’; and it happens.
(NRSV)

では古英語における知覚動詞の補文内部に出現する準動詞はどのような過程を経て算出されているのだろうか。本発表ではラテン語聖書 *Vulgata*、ゴート語聖書 *Wulfila*、古英語の四福音書 *Lindisfarne*、*Rushworth*、*West Saxon Gospels* における知覚動詞補文に出現する準動詞を比較し、古英語における知覚動詞補文に出現する準動詞がどのような性質を持っているのか、また一致やスクランプリングなどの統語現象を経験的証拠とし、補文の内部構造はどのようなものかを明らかにしていくことを目的とする。また本発表の主張として、知覚動詞補文に出現する準動詞は(4)に示すように補文主語と格を一致させ叙述を表しており、形容詞小節と同様に補文内部では形態的に叙述を認可するシステムが確立していたことを提案する。

(4) 知覚動詞の補文に出現する準動詞と補文構造

a. ...[perception V [SC [NP] [NP/AP [N/A (-i)an/-ende, endne) ...]]]
Acc Acc

b. And þonne ge ***geseoð sudan blawan***, ge secgaþ, þæt [htætt] is towerd; and hit byð.
Acc Acc (Luke 12:55. WSG)

c. Ðonne ***geseoð hi mannes Sunu cumendne*** on genipum mid mycelum mægene and wuldre.
Acc Acc (Mark 13:26. WSG)

参考文献

- Declerck, R. (1991) *A comprehensive descriptive grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
 江川泰一郎. (1991³) 『英文法解説 改訂三版』 東京：金子書房.
 Felser, C. (1998) Perception and Control: A Minimalist Analysis of English Direct Perception Complements. *Journal of Linguistics*, 34. pp. 351-85.
 _____. (1999) *Verbal Complement Clauses: A Minimalist Study of Direct Perception Construction*. Amsterdam : John Benjamins Publishing Company.
 Van, Gelderen, E. (2018) *The Diachrony of Verb Meaning Aspect and Argument Structure*. New York: Routledge.

小林 茂之 (聖学院大学)
古英語 V2 語順の変異と動詞文末語順

古英語ウェセックス方言においては、動詞文末語順が基本語順であることについて言語接触の観点から説明できる一方、ゲルマン諸語で一般的な V2 語順も古英語の典型的な語順である。この場合、V2 語順が動詞文末語順から派生されるという Kemenade (1987) 以来の分析を採用する立場をとることになるが、V2 語順の存在が古英語語順の歴史的変異の観点から重要である。V2 語順は近代ドイツ語などのように、ゲルマン諸語においては典型的な語順であるが、基底の語順が VO であるか OV であるかによってタイプが分かれる。前者の例としてはオランダ語、後者の例としてはドイツ語がよく知られている。つまり、古英語の V2 語順の分析は基底語順に依拠するからである。

先駆的研究の Kiparsky (1995) のように CP の発達を仮定しなくても、最近の通時統語論の展開において、その vP の移動により説明できるので、古英語の V2 語順の分析はその基底語順が VO/OV のどちらに拠るのかという問題に帰着できる。したがって、初期古英語の基本語順が動詞文末であるという分析に基づく場合、V2 語順は OV 語順から派生したと分析されるけれども、VO 語順も存在するので、統語論的には目的語は動詞の右側に右方転移によって派生したと分析される。一方、古英語の基本語順を VO とする分析によれば、Pintzuk and Taylor (2006) で OV からの右方転移が不可能であるとする診断基準が提案されている。Ringe and Taylor (2017: 481) は古英語の基本語順を VO である証拠として、後期古英語のアルフリッチ『諸聖人の生涯』の用例をあげている。

本研究発表では、後期古英語期において基本語順が VO であると認められるとしても、初期古英語においては基本語順が OV であるという分析をとることは可能であることを、Müller (2007) の線状化 (linearization) の理論からも V2 語順を VO および OV のどちらの基底語順からも派生することが可能である点から検討し、古英語の歴史的変異として V2 語順の基底語順が OV から VO にシフトしたという仮説は北部のいわゆるデー地域における古ノルド語との言語接触の影響という歴史社会言語学的な説明によって裏付けられる。

参考文献

- Biberauer, T. and Roberts, I. (2007). 'Cascading Parameter Changes: Internally-Driven Change in Middle and Early Modern English', in *Grammatical Changes and Linguistic Theory: The Rosendal Papers*, 79-113. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Kiparsky, P. (1995). 'Indo-European Origins of Germanic Syntax,' in Batteye, A. and Roberts, I. (eds.) *Clause Structure and Language Change*, 140-69. New York: Oxford University Press.
- Müller, G. (2007). 'Cyclic Linearization,' in Saueled, U. and Gärtner, H.-M. (eds.) *Interface + Recursion = Language?*, 61-114. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- Fischer, O., Smet, H.de and Wurff, W. van der (2017). *A Brief History of English Syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pintzuk, S. (2005). 'The Syntax of Objects in Old English,' in Batllori, M., Hernanz, M.-L. (eds.)

- Grammaticalization and Parametric Variation*, 251-66. Oxford, New York: Oxford University Press.
- Pintzuk, S. and Taylor, A. (2006). "The Loss of OV Order in the History of English," in Kemenade and Loss (eds.) *The Handbook of the History of English*, 115-43. Malden, Oxford: Blackwell Publishing.
- Ringe, D. and Taylor, A. (2017). *The Development of Old English: A Linguistic History of English* Volume II. Oxford University Press.
- Roberts, I. (2011). 'Head Movement and the Minimalist Program', in Boeckx, C. (ed.) *The Oxford Handbook of Linguistic Minimalism*, 195-219. Oxford, New York:
- Kemenade, A. van (1987). *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*. Dordrecht: Foris.

尾園 絢一（東北大学・専門研究員）

ヴェーダ語の命令的言及法（hortativer Injunktiv）について

ヴェーダ語では、*dā*「与える」、*dhā*「置き定める」等のアオリスト命令法2・3人称単数を言及法（Injunktiv）が担うことが知られている：e.g. *dās*（< **deh*₃-s, cf. gr. *δός*）, *dhā-s*（**d^heh*₁-s, cf. gr. *θής*）。この命令的言及法（hortativer Injunktiv, K. Hoffmann, *Der Injunktiv im Veda*, p.261ff.）を巡って2つの問題が提起される。一つは、何故、本来の命令法語形（語尾を伴わない形 **deh*₃, cf. lat. *ce-do*, 小辞による拡張 **d(e)h*₃-*d^hi*, cf. aav. *dā'dī*）ではなく言及法が命令形を担うようになったのかということである。2つ目は、例えば *dehí*（< **dazd^hi* < **deḍ^hd^hi* < **de-dh*₃-*d^hi*, cf. jav. *dazdi*, aksl. *daždь* < **dadjь*）のような現在命令法との使い分けである。リグヴェーダにおいてはアオリスト言及法 *dās*, *dhās* 等と現在命令法 *dehí*, *dhehí* 等と同じ頻度で現れるが、現実には機能的な差異を認めることは難しい。仮に機能的差異があると考えれば、当然アスペクト（perfektiv vs. imperfektiv）の差に求められる。*dā*, *dhā* のアオリストには、語根に直接語尾を付ける、語根アオリスト（*á*）*dā-*,（*á*）*dhā-* が用いられる。元来瞬間的（punktuell）な動作様態（Aktionsart）を持ち、アオリスト語幹を基本とする動詞語根（Aoristwurzel）であったと考えられる。他方現在語幹には非幹母音型（athematisch）重複語幹 *dādā*-*lād-* が用いられ、反復又は習慣的（habituell）な機能が推測される。理論的には、アオリスト命令法は一回の行為を、他方 *dehí* 等の現在命令法は、持続的、反復的な行為を予定する。

本発表では、*dās* 等の言及法が命令形を担うに至った事情、および現在命令法との機能的差異の解明に向けて、ヴェーダ語の言及法（e.g. *dās*, *dāt*）と命令法（e.g. *dehí*, *dātu*）の用例を、インド・ヨーロッパ祖語の命令法体系、アヴェスタ語、ギリシア語（ホメロス）に残る対応形、ヴェーダ語における活用（Paradigma）レベルの分布の観点から検証する。

笠松 直 (仙台高等専門学校)

梵文『法華経』諸写本における子音語幹名詞の活用の変遷

サンスクリット (Skt.) 語の子音語幹名詞は、中期インド語では、例えば *loka-vid-*「世間知」に対するパーリ語 *loka-vidu-*のように母音語幹に変化することがある。

この両者が混交したかのような特徴を示す仏教混交梵語 (BHS)、特に『法華経』では、おむね韻文部分に BHS 語形が、散文部分に Skt. 語形が現れ、これはあたかも両部分の成立時期の差を示すかの如くである。BHS (*loka-*)*vidu-*と Skt. (*loka-*)*vid-*との分布はこの期待に背かない。

しかし「会衆」を意味する BHS *pariṣā-*と Skt. *pariṣad-*との場合、旅順写本などの古写本は、一部散文部分においても BHS 的な *pariṣā-*の活用形を示す(例えば旅順 B-7-Verso 2 *pariṣāṇām*)。これより書写時期の新しいカシュガル写本が並行箇所では *pariṣadām* を示すこと、さらに「方角」を意味する BHS *disā-*と Skt. *dis-*について旅順本 B-16-Verso 4 *pūr[vb]āyām disāyām* に対してカシュガル本 407b3 (*pūrvasy)ām disy* とあることを考え合わせれば、伝承過程で順次 Skt. 的に書き換えられていったであろうことは明白といえる。

但しこの書き換えは、必ずしも組織的、一律であったわけではない。カシュガル写本に徴すれば、*disā-/dis-*の活用表には「混乱」が顕著である。韻文部分では *disā-*を基礎とするものの、散文部分では *disām* (sg. acc.), *disāyām* (sg. loc.) や *disāsu* (pl. loc.) が Skt. 的な *disi* (sg. acc.) ないし *dikṣu* (pl. loc.) が、ときには一連の文脈の中に混用される。

以上の事実は、個々には関連研究者の暗黙知の如くあったように思われる。単語の出典箇所については戸田 (カシュガル写本校訂本) が既にチェックしてもいる。本発表は、古写本を中心に関連語形の出典箇所を網羅的に提示するばかりでなく、通時的・文法的に整理・考察することで、上述の変遷の事情を合理的に説明し、各写本 (群) の言語的特徴の一端を明らかにする。

川村 悠人 (広島大学)

「雷霆神」の起源—梵語 *indra* と *vṛtrá* の解釈史

インドラは、神々への讃歌集『リグ・ヴェーダ』の中で最も多くの讃歌を捧げられる英雄神として知られる。彼が手にする武器の名ヴァジュラ (*vájra*) は元来「棍棒、金槌」を意味したが、後のヒンドゥー教に顕著なように、インドラが雨を降らせる神と見なされるようになると、ヴァジュラも雨との関連のもと「雷光、雷撃」との結びつきが強くなっていった。おそらく、このような後代の思想が『リグ・ヴェーダ』にも持ち込まれ、また、他の印欧語族の神話体系からの類推も加わって、『リグ・ヴェーダ』に描かれるインドラを雷霆神とする理解が人口に膾炙しているが、それはインドラの本来的な姿ではない。雨をもたらすというインドラの機能はすでに『リグ・ヴェーダ』に確認され、インドラやヴァジュラを雷光と関連させて描く讃歌もあるようだが、そのように、インドラに雷霆神としての姿を、ヴァジュラに雷光の性質を想定する個所は例外的で、インドラの本質に関わるものではない。これが現ヴェーダ学界の通常の見解である。ヴェーダ文化では、基本的に、雨を降らせる役割は雷雨の神パルジャンヤ (*parjanya*) が担う。

未だ解決していない問題は、このように極めて断片的な姿や性質が、なぜインドラを特徴づけるものへと変化していったかである。その契機となったものは何か。この問題を、神名インドラ (*indra*) と、インドラが倒す大蛇 (障碍) の名ヴリトラ (*vṛtrá* 「覆うもの」) という二語に対して与えられる語源解釈の歴史を辿ることで考察してみたい。語源解釈には、人々の世界理解の仕方が反映されるため、そこから当時の思想状況を探ることが可能と考える。

鍵となるのは、言語学者ヤースカ (紀元前 5 世紀–紀元前 4 世紀頃) が残した書『語源学』である。同書では、インドラを「雨水をもたらす者」ととらえる語源解釈が全面に押し出されており、これはヤースカ以前のヴェーダ文献が与える語源解釈には見られない特徴である。ヴリトラについても、それに「雲」という意味を設定する、前代にはない語源解釈が『語源学』では施される。ヤースカはそれを語源学者らの共通理解であると言う。ここに、雲ヴリトラを倒し、その内部に溜まっていた雨水を解放する者としてのインドラの姿が立ち現れてくる。ここから、インドラがヴリトラを倒すために振るう武器ヴァジュラが「雷光、雷撃」と想定されるに至ることは容易に想像がつく。インドラを、雷光ヴァジュラを振るう雷霆神とする下地の一つは、ヤースカから語源学者に用意された可能性を指摘できる。